

和刻伊曾保物語の古版本に つきて

龜田次郎

西文東移の史上、翻譯の鼻祖として興味深き「伊

會保物語」の古版本につきては、已に古くは水谷不倒氏が「早稲田文學」誌上に、近くは新村博士が「太陽」誌上に論述せられ、前者は「列傳體小説史」明治三十年五月十四日刊に、後者は「文祿舊譯伊曾保物語」明治四十四年六月二十五日刊に收録せられたり。共に論ずる所精細を極め學者必讀の好文字なりと雖も、未だ此の書の國字譯最古の刊本慶長版の存在を知らず、爲めに、これにつきて何等の記載なきは惜むべし。予、最近この慶長本の存在を知り、これが調査を遂げたり。依て今茲にそを世に紹介すると同時に、他の古版本との比較對照を以てし、以て大方諸賢の補正を仰がんとす。尤も予が古版と稱するは、凡てを網羅せる意にあらずして、寛永以前の方に止まれり。今、下に年代順によりて其の數種を掲げて論述する所あらんとす。

一、文祿本

伊曾保物語の本邦に於て翻譯せられたる最古の刊本は、文祿二年天草の耶蘇會學林に於て開板せられしものなりとす。この書拉丁語より我國の俗語に譯し、羅馬字に綴りたるものにて、單行本にはあらず。平家物語と合綴したり。全書の中九十七頁を占め、雁皮紙摺小形本にして、現に大英博物館に珍藏せらるるといふ。新村博士、之を國字に書き改め、「文祿舊譯伊曾保物語」と題し、昨春以來之を本誌に連載し、完結の後、更に解説及附録を添加して、今夏單行本となし刊行し世に行はる。今茲に改めて詳述するに及ばざるべし。

二、慶長本

文祿本につきて刊行せられたるは、慶長活字本なりとす。これ國字を以て刊行せられたる最古のものなり。尤もこの開板以前、已に繪卷物として傳はりし別本ありし由なれど、刊本としてはこの

書や初なる。而してこの慶長活字本につきては、

已に大槻博士^{六六先哲所}朝倉無聲氏^{日本小説年表}共

其の存在を述べたれど、世にこれを知れる者稀に

して、碩學の新村博士亦未だ見ざる所なりといへり。

(文祿舊譯伊曾保物語所載) 予、頃日山田孝雄氏より實業家

内野五郎三氏が和漢の古版珍籍を所藏せる中に、伊曾保物語一部あるを聞き、行きてこれを見る。

後、これを他の古版數種と比較對照し、且、其の版式、内容を調査して、其の慶長活字本なることを知るに至れり。茲に、本書の梗概を記して、從來其の存在を詳かにせざりしこの珍籍を紹介せん。

予の慶長活字本と稱する内野氏珍藏本は上中下三冊に分れ、美濃紙版活字十二行本にして、柱にインホと片假名もて記し、この下に各上、中、下の文字を添へ、なほ下に丁數を附せり。序文、譯者の名もなく、卷末亦刊行年月を記さず。本文は漢字草書體平假名なり。予は其の用紙。版式、表

和刻伊曾保物語の古版本につきて

裝等より他の慶長活字本と同一なるを知り、この

時代刊行本と認めたり。其の刊行年月無きは、疑

ふ餘地あるが如しと雖も、慶長板にして現に「定家假名遣」と稱する「假名文字遣」にも類例あれば、こは吝むべきにもあらざるべしと考ふ。尙、

其の活字版なる事は、上卷第一章中、一丁裏十行

目に、「ありしてすゑたりしこて」とありて、「たり」と「し」との間に「か」の一字を脱したる、中卷

第一章中、一丁表六行目「わかつなる此身を」とありて、「つ」「か」二字を顛倒せるが如きは、其を

證するに餘りあるべし。本書各卷の丁數は、

上卷 目錄一丁(只丁數のみを附せり) 本文二十七丁

中卷 目錄二丁(中、下兩卷亦同じ) 本文三十七丁

下卷 目錄二丁 本文三十八丁

あり。次に其の目錄を示さん、

(後の對照便宜のため、傍に元和寛永二本との異同を記せり。元は元和本、寛は寛永本の略

なり。）

伊曾保物語上目録

第一 本國の事

- 二 荷物をもつ事
- 三 柿をときやくする事
- 四 農人のふしんの事
- 五 けた物のしたの事
- 六 風呂の事
- 七 しやんとうしほのまんとけいやくの(元、寛、の字候トアリ)事
- 八 くわんかくの文字の事
- 九 さんの法事の事
- 十 りいひやよりちよくしの事
- 十一 伊曾保りいひやにゆく事
- 十二 いそほりいひやに居所をつくる事
- 三 (元、寛、十三トアリ)あき人かねをおとすくしの事
- 四 (元、寛十四トアリ)中間とさふらひと馬をあらそふ事
- 五 (元、寛十五トアリ)長者と他國のあき人の事
- 六 (元、寛十六トアリ)いそほと二人のさふらひ夢物語の事
- 七 (元、寛十七トアリ)いそほ諸國をめくりし(元寛、りの二字るトアリ)事
- 八 (元、寛十八トアリ)いそほようしをさたむる事
- 九 (元、寛十九トアリ)ねたなを帝王ふしんのこと

二十 ゑりみほいそほかことをそうもんの事

伊曾保物語目録中

第一 いそほ子息にいけんの事

- 二 ゑしつとの帝王よりふしんの(寛の字ナシ)返答の事
- 三 ねたなをいそほに尋給ふふしんの事
- 四 いそほていわうに答る物語の事
- 五 かくしやうふしんの事
- 六 さふらひうたかにすく事
- 七 伊曾保人に請せらるゝ事
- 八 いそほ夫婦の中なをしの事
- 九 いそほりんしうにおゐて鼠蛙のたとへをいひておはる事
- 十 いそほ物のたとへをひきける條々
- 十一 狼とひつしの事
- 二 (元寛 十二トアリ)犬と羊の事
- 三 (元寛十三トアリ)犬と(寛と字ナシ)しゝむらの事
- 四 (元寛十四トアリ)師子王ひつし(元寛牛ノ一字アリ)野牛の事
- 五 (元寛十五トアリ)口輪と盜のこと
- 六 (元寛十六トアリ)鶴と狼の事
- 七 (元寛十七トアリ)師子王と駒馬の事
- 八 (元寛十八トアリ)京いなかのねすみの事
- 九 (元寛十九トアリ)きつねとわしとの事
- 二十 わしとかたつふりのこと

- 一 (元寛廿一トアリ)からすと狐の事
- 二 (寛廿二トアリ)馬といぬと(元寛と字ナシ)の事
- 三 (寛廿三トアリ)しゝわうとねすみり事
- 四 (寛廿四トアリ)つはめと諸鳥の事
- 五 (寛廿五トアリ)かはつか主君を望む事
- 六 (寛廿六トアリ)とひと鳩の事
- 七 (寛廿七トアリ)からすとくしやくの事
- 八 (寛廿八トアリ)はいとありの事
- 九 (寛廿九トアリ)いたちの事
- 三十 馬と師(寛と師ノ二字師トナル)子王の事
- 一 (元寛卅一トアリ)師子王とはすとるの(寛の字ナシ)事
- 二 (元、卅二トアリ)馬とろはの事
- 三 鳥けたものとたゝかひの事
- 四 かのしゝの事
- 五 庭鳥ときつねの事
- 六 腹と五たいの事
- 七 人とろはの事
- 八 狼とはすとる事
- 九 さると人の事
- 四十 師子王とろは(元寛の字アリ)事

伊會保物語下目録

- 第一 ありとせみの事
- 二 狼といのしゝの事

和刻伊會保物語の古版本につきて

- 三 きつねと庭鳥の事
- 四 たつと人の事
- 五 馬とおほかめの事
- 六 狼と狐の事
- 七 おほかめ夢物語の事
- 八 鳩とありの事
- 九 おほかめと犬の事
- 十 きつねとおほかめの事
- 十一 野牛とおほかめの事
- 十二 わしとからすの事
- 三 (元、十三トアリ)師子王とろはの事
- 四 (元十四トアリ)野牛ときつねの事
- 五 (元十五トアリ)ある人佛をいのりし(元寛りし二字トナル)事
- 六 (元十六トアリ)鼠と猫との事
- 七 (元十七トアリ)ねすみのたんかうの事
- 八 (元十八トアリ)男二(元おとこトアリテ二ノ字ナシ)女をもつこと
- 九 (元十九トアリ)かきみの事
- 二十 孔雀と鶴の事
- 廿一 人をねたむは身をねたむと云事
- 二 (元廿二トアリ)かへると牛のこと
- 三 童子と盗人の事
- 四 修行者の事

藝文

九〇

五 庭鳥こかねのかいこをうむ事（元、事字ナシ）
六 さると犬の事

七 かはらけまんきをおこす事

八 鳩ときつねの事

九 出家とゑの子の事

三十 人の心のさたまらぬ事

一（元卅一トアリ）鳥人に教化をなす事

二 さるときつねの事

三（元卅三トアリ）三人よき中の事

四 出家と盗人の事

の如し。この目録に見ゆる如く、上巻及中巻の四分の一は、伊曾保傳にして、其餘は喩言なりとす。而して内野氏所藏本の傳來は、其の卷末の奥書及び各所藏者の捺印によりて、之を窺知するを得べし。今其の下巻につきてこれを示さん。

卷末に、

この活字板伊曾保物かたり三卷は、明治三年さ月神田集議判官より惠れたるを家藏とす。

陽春廬のあるしゑるす。

と墨書にて記し、又卷首に、山崎文庫、綾齋、椹

舎之記、陽春廬記、皎亭改藏の五印及卷末に湯島狩谷氏求古樓圖書記の二印ありて何れも赤朱のものなり。これによりて山崎（美成）、狩谷（披）、椹舎（米）、神田（孝）、小中村（矩）、内野（三郎）、の諸氏に傳はれるを知るべし。予、後に至り、「大槻博士また伊曾保物語の古板本を藏せらるゝと聞き、これを借覽するの榮を得たり。然るにこの大槻氏の本、全く前記内野氏本と同一のものなりき。而して大槻氏本は、元舊藩主の所藏に係り、伊達伯觀瀾閣圖書印あり。これを博士の令兄如電氏、藩主より拜領して、其の家藏となれりといふ。其の上巻見かへしに書者未詳の下の文あり。

西洋紀聞云、シシローヤ漢譯西齊里亞といふ我俗にシシローヤといふは則此

エーウロハ、極南中海の一島也、此島二山あり。

一山は常に火を出し、一山は常に烟を出して晝

夜絶ずといふ。本朝寛永年間、こゝに來る耶蘇の

徒にコンハニヤヨセフといひしは、此國の人な

りと云。ジョセフ後に正にめして、字を岡本三右衛門といひし也。イッホノ作者也といへり。此書世にいと稀也。可秘藏也。

と墨書にて記し、其の後に、

伊曾保物語の翻譯者は、ジョセフにあらず。バヒアンなり。其年代も文祿元年にて、岡本が我國に渡來せし寛永二十年よりは五十二年前なり。

乙巳(明治三十八年)四月 大槻如電。

と朱書にて書き添へあり。新村博士の「文祿舊譯伊曾保物語」附録「西洋文學翻譯の嚆矢」第四頁に、

自分の見た元和活字本には誰の筆か、岡本三右衛門の譯であると、表紙裏に書いてあつた。其據所は示してない。

と見えたるは、この書の事にや。或は他の書なるか。若し萬一この書なりとせば、決して元和版に

はあらず。元和版とは文句及版式に於て異同あり。おもふに他の異本なるべし。其は兎まれ角まれ、氏も亦大槻如電氏と司じく、譯者こつきて岡本三右衛門説を否定してこれを辨せられたり。予は慶長活字本の、内野大槻二氏に珍藏せらるゝを知り得たるを大に欣ぶ者なり。

予は、この慶長活字本を、新村博士の「文祿舊譯伊曾保物語」に對照せしに、何等直接の關係無きを認む。其の版式文體は固より、物語の順序不同にして相互一致せざる喩言過半を占め、其の伊曾保傳に於ても、大に其の内容を異にせるを知れり。尙喩言の數、文祿本七十を有し、慶長本六十四を載す。而も前者は抄譯なるに拘らず、數に於て多く、且、俗語體なるも文また簡潔なり。二本に於て相一致せるものは、僅かに二十有餘に止まり、其餘四十は各一方に於て缺けたり。以て其の兩者の差異を知るべきなり。この故に、予は、こ

の慶長活字本は、全く文祿本と、其の撰を異にせるを認むと雖も、其原本及譯者の名今之を知るに由なきを憾とす。然れども、この慶長活字本が、後日世に出てたる斯種の刊行本の祖書となれることは注意すべし。其は以下順次記せる所を以て知るべきなり。

三、元和本

慶長本に次ぎて出てたるを、元和活字本とす。予の調査せる所によれば、帝國圖書館所藏貴重書の一にして、同館和漢書目録に寛永十三年著カと記せる三卷本を以て、この元和本と考ふるなり。先づ本書の梗概を示すべし。

帝國圖書館本は、尾府内庫圖書の朱印、其下に佛の黒印を捺し、外に中川氏藏の朱印あるものにして、蓋し舊名古屋藩の藏書に係り、其の佛書類に收められしを、後中川重麗氏の所藏に歸したり

しものならん。この書上中下三卷に分れ、

上卷目録一丁^(上目ト記ス)本文二十八丁、

中卷目録二丁^(中日、中ニ、ト記ス)本文三十九丁、

下卷目録二丁^(下目、下ニト記ス)本文四十丁、

あり、美濃紙板十一行活字本なり。柱にイソホとのみ片假名にて記し、下に丁數を附し、この丁數の上に上、中、下と記して各卷を區別せり。

序文、譯者は勿論、刊行年月をも載せず。本文漢字草書體平假名文にして、字體版式凡て明かに慶長本を模したるを認め得べし。只其の行數を減少し、版式に於て些少の變更を行ひしに過ぎずといふべし。今、この慶、元二本の主要なる差異を舉ぐれば左の如し。

1. 目録の文句に差異あり。(慶長本の處に對照せり)。

2. 行數慶長本は十二行なるに、元和本は十一行なり。

3. 本文丁數、慶長本より元和本増加せり。
4. 各卷本文章句の冒頭を、上卷にては、慶長本は其の最初のもののみ第一と記し、以下は只數字をのみ附したるに、元和本は一より十まで第の字を附し、十一以下は只數字のみを記せり。中卷にては、慶長本は最初のもの數字もなく、其の次章に於て第二と記し、以下は數字のみ附したるを、元和本にてはこの二章に各第一、第二と記し、以下は只數字のみ附せり。但し下卷にては慶、元二本共に最初の章のみ第一と記し、以下は只數字のみを附せるは相同じ。
5. 本文の文句慶、元二本互に和漢文字の差異ある所多きは勿論、また其の文句に増減あり。こは次の寛永本との三者對照表を下に記し、其の一例を示せるが如し。(寛永版本の條參照)

6. 各卷の末尾、慶長本にては、只、其の書名の下に上、中、下、とのみ記し、本文と列を並べて記したるに、元和本にては、なほこの外、終の一字を上、下二卷に附し、(中卷ニハナシ)而も本文よりは列を下げて記せり。殊に上卷の分は非常に下げてあり。

以て其の一斑を知るべし。要するに元和版は慶長本に依據し、文句、版式に些少の變更を加へて刊行せるが如し。

序に云ふ。この元和本、新村博士の所説の如く、世に活字本と稱せらる。予亦之に従へり。然れども、予の見たる元和本即ち帝國圖書館本は、また整版本とも思はるゝ點なきにあらず。予これを疑ひ、大槻博士、山田孝雄氏に質す。二氏亦予と同意なり。仄に聞く。京都文科大學國文研究室に一部の元和本を藏すと。この書活字本なるか。將、予の見たると同一本なるか。今之を對比するを得ず、

遺憾なり。今、新村博士が「文祿舊譯伊曾保物語」に挿圖として示されたる元和活字本を予の見たる本と比較對照せしに、字體、版式全く同一なり。新村博士の撮影せられしは、蓋しこの京都本なるべし。若し然らば予の見たる本も亦活字本なるべし。然れど、また一方より見れば、活字本を後に模刻せしとも思はる。模刻本なりとせば、予の見たる本、帝國圖書館和漢書目錄に、寛永十三年著カと疑を存せるは當れりとすべきが如しと雖も、これを寛永十三年本とせるは何に依據せしか、詳かならざるなり。聊、疑を記し、尙、大方の教示を俟つ。

四、寛 永 本

元和本に次ぎて出でたるを、寛永十六年卯月刊の活字本とす。この書、予の見たるものは、東京高等師範學校所藏本にして、耘堂、福田文庫及

達磨屋待賣堂の舊藏印あるものなり。この書上、中、下三卷に分れ、美濃紙十二行活字版にして、柱には只各卷上、中、下と記し、其の下に丁數を示せるに過ぎず。序文、譯者の名あるなし。下卷末に刊行年月を附す。

上卷 目錄一丁 本文二十四丁

中卷 目錄二丁(第二丁ニト記セリ) 本文三十三丁(丁數ハ目錄第二丁ヨリ數ヘテ三十ナレリ)

下卷 目錄二丁(丁數ヲ附セリ) 本文三十四丁(丁數ハ目錄ヨリ數ヘテ三十ナレリ)

にして、本文の字体は漢字草書体平假名文にて、所謂、嵯峨版活字にて印行せり。其の活字なることは、一見明かにこれを知り得るのみならず、中卷目錄二丁表の三十、馬師と子王の事の如く師と二字顛倒せるを以ても、これを証するに足る本書上卷見かへしに、

此書、近世紅毛學家の説くわけければ、爰にい

わす。寛永十六年上木の本は稀也。万治二年己亥正月吉日とある本も、上の巻、下の巻のみにて、中の巻あるはすくなし。大浪先生珍藏の拂郎察國鏤刻の此物語りの書本よりみれば、此本は其十の一也。所藏甚すくなし。

波爾杜瓦爾人より口授して國語にせしものなるべし。芸堂印。

と墨書にて記せり今この寛永本を見るに、元和本に依據してこれが文句、版式に些少の變更を加へしに過ぎざるを認むるなり。現に寛永版は、元和版の十一行を十二行となしたるに拘らず、其の上巻の目録は、他の中、下二巻と異りて、元和版の如く、十一行に印刷し、一二の和漢文字の相違あるの外、全く相似たり。これ其の証とすべし。然れども寛永版は、其の印行の際、元和版の文字、版式を改めたる處あれば、またこの兩者に於て異なる點あるは勿論なり。今其慶、元、寛三本を對比し

其の主要なる差異を下に示さん。

1. 目録の文句に差異あり。(前慶長本の處に對照せり)

2. 行數元和本十一行なるに、寛永本は上巻目録を除きて、他は凡て十二行となり、慶長本と相同じ。

3. 行數、文字を細小にせる爲め、丁數に於て寛永本は元和本より減少せるのみならず、慶長本よりも少し。

4. 各卷本文章句の冒頭は、元、寛二本全く相似たりと雖も、慶長本と異なる所あるは慶長、元和二本の對比の條にいへるが如し。

5. 本文の文句慶、元、寛三本互に和漢文字の差異ある多きは勿論なれど、殊に甚しきは、慶、元二本の中巻最初の章、「いそほ子息にいけんの條々」(慶長本ニハ條々ヲ事トセリ)とある廿條を、寛永本に比較するに、前者の一、二を合し

藝文

九六

て一とし、三、四を合して二となし、五以下を三以下となして、此には十八條とせる事なり。こは後の萬治本にも襲用せる所にして、特に著しき相違なりとす。今下に各卷最初の一章を取りて、慶、元、寛三本の差異を表示すること左の如し。

○上卷第一章

(下表は慶長本の丁、行の順序に外れて、三本の異同を示せり。又其の丁數及行數は各本の條下に一〇四の如く略記せり。一は丁數、オは表、四は四行目なるが如し。この例に準へ。)

慶長本	元和本	寛永本
あも・うにや(一〇四) ものいふこと(一〇一) あてえなす(一〇三) 人うれり(一〇四) 此ものをかいとる(一〇九) かいそへて(一〇一) そのさとおいて(一〇二) 智者(一〇一) たつねて云(二〇二) しやんと(二〇四) 給(二〇五)	あも・うにや(一〇四) ものいふこと(一〇一) あてえなす(一〇四) 人うれり(一〇五) 此者をかいとる(一〇一〇) かいそへ(一〇一) 其里において(二〇二) 知者(二〇二) たつねていはく(二〇三) かのしやんと(二〇六) たまはく(二〇七) (コノ例多シ其ノ一ヲ示ス)	あもにや(一〇四) ものいふ事(一〇一) あてえなす(一〇三) 人うれり(一〇四) 此者をかいとり(一〇九) かいそへ(一〇一) その里におゐて(一〇二) 知者(二〇一) たつねていはく(二〇二) かのしやんと(二〇四) 給ふ(二〇五)

○中 卷 第 一 章

おほせければ二人(二〇六) こたへて云(二〇二) たいないをととはす(二ウ一) なんち生れたる(二ウ一) おいて(三オ三) しやんと(三オ五) いさゝかのあたひにかひと(三オ一〇)	仰ければ二人(二〇七) 答いはく(二ウ一) たひなへとます(二ウ三) 汝か生れたる(二ウ三) おゐて(三オ四) しやむと(三オ七) いさゝかのあたひにかひと(三オ一一、三ウ一) 關のまへにてか、い曾保か(三ウ二) しやんと(三ウ四) ことふ(三ウ五) しやん共(三ウ七) 給也(三ウ九)	仰ければ人二人(二〇五、六) 答云(二〇一〇) たいないとは(二ウ一、二ウ二) なんちか生れたる(二〇一二) おゐて(二ウ二) しやんとノ字ナシ(三オ三) いさゝかの間にかい取(三オ七)
せきのまへにていそほか(三オ一一) しやんと(三ウ一) こたふ(三ウ三) しやんと(三ウ五) 給ひけり(三ウ七)	關のまへにてか、い曾保か(三ウ二) しやんと(三ウ四) ことふ(三ウ五) しやん共(三ウ七) 給也(三ウ九)	せきの前にていそほか(三オ八) しやんも(三オ一〇) こたふ(三オ一一) しやんも(三ウ二) 玉ひたり(三ウ三)

慶 長 本

元 和 本

寛 永 本

ナシ(一〇二) いけんの事(一〇二) 第一(一〇三) わかづなる(一〇六) てんめいをそ(一〇一〇、一一)	第一(一〇二) いけんの條々(一〇二) 一、(一〇三) わかづなる(一〇六) てんめいをそ(一〇一〇、一一)	第一(一〇二) いけんの條々(一〇二) 一、(一〇三) わかづなる(一〇五) てんめいをそ(一〇九、十)
---	--	--

藝文

く・とくとなりて(一ウ八)
 我・つまに(一ウ一二)
 けんとんはういづの物(二オ二)
 悪人のいせい(二オ二)
 能言を(二オ九)
 權威をもて(二ウ一)
 心はかなくして(二ウ三、四)
 大事もいてきたれ(二ウ五)
 千萬く・みんよりは(二ウ八)
 ひとたひあんせよ(二ウ九)
 まなこをうりやうる(二ウ一一)
 病を治するにはちやを(三オ一)
 能おしへをもてする也(三オ二)
 おひたるもの(三オ三)
 ほたされてなりとし老(三オ四、五、)
 したかひて(三オ五)

く・とくとなつて(一ウ八)
 我妻女に(二オ一)
 けんとんはういぢの者(二オ二)
 悪人のいせい(二オ四)
 よきことは(二オ一〇)
 權威をもつて(二ウ三)
 心はかなうして(二ウ五、六)
 大事もいてきたれ(二ウ七)
 千万く・みんよりは(二ウ一〇)
 ひとたひあんせよ(二ウ一一)
 まなこをうりやうる(三オ二)
 病を治するには薬を(三オ四)
 能おしへをもつてするなり(三オ五)
 おひたるもの(三オ六)
 ほたされてなり汝も年おい(三オ七)
 したかつて(三オ八)

く・とくとなつて(一ウ五)
 妻女に(一ウ九)
 けんとんはういぢの者(一ウ一二)
 悪人のいせひ(一ウ一二)
 能詞を(二オ五)
 ごんいをもつて(二オ九)
 こゝろはかなうして(二オ一二、一二)
 大事いてきたれる(二ウ一)
 千万く・いんよりは(二ウ四)
 千たひあんせよ(二ウ五)
 まなこをうりやうる(二ウ七)
 病を治するには薬を(二ウ九)
 よき数をもつてするなり(二ウ一〇)
 老たる者(二ウ一一)
 ほたされて也汝も年老(二ウ一二)
 したかつて(三オ一)

○下 卷 第 一 章

慶 長 本

元 和 本

寛 永 本

は・い・出(一オ四)
 蟬來つて(一オ五)
 ふゆされまてもさやうに(一オ六)

は・ひ・出(一オ四)
 蟬きたつて(一オ五)
 ふゆされまてもさやうに(一オ六)

は・い・出(一オ四)
 蟬來りて(一オ五)
 冬されまて左様に(一オ六)

おんきよく(一オ一一)
ゑひのうちに(一ウ八)
返々も是を思(一ウ九)

おんきよく(一オ一一)
ゑひのうちに(一ウ九)
返々も是を思(一ウ一〇)

おんきよく(一オ一一)
ゑひのうちに(一ウ七)
ナシ

6. 各巻の末尾、寛永本には書名の下に上、中、下、の各巻を記し、尙、終字を添へたり。

これ慶、元二本と異なる所なりと雖も、寧、元和本に近しといふべし。又下巻最末に、寛永本は刊行年月を記しあるは、慶、元二本に無き所なりとす。

之を要するに、寛永本は元和版に據り、字體、版式に少しく變更を行ひしに止まるものというて可なり。

以上慶、元、寛、三種は、慶長本其の祖書となりて、順次後版に依據する所あらしめしものにして、只多少の變更を如へたるに過ぎずといふべし。現に慶長本上巻第一丁ウ十行の「ゑたりかしこし」のかを脱したるを、元、寛二本亦これ

脱し、又慶長本中巻第二丁ウ十一行の「ひかりを「ひとり」と誤れるを、元寛二本にも皆「ひとり」と其儘襲へるは其の一證ともなるべし。

尙寛永版の後に、萬治二年己亥正月刊行の三巻本ありと雖も、この書につきては、已に十數年前、水谷不倒氏が「早稲田文學」誌上に掲載せる「外國文學の輸入イソップの翻譯」と題したる論文中に、引例挿圖を加へて詳述せられ、後、「列傳體小説史」にもこれを收録せり。又最近、東京百華書房發行の「十錢文庫」第五編として、京都の人舊雨樓氏これが校註を加へて刊行し、(明治四十四年五月十三日刊)世に偏く行はれたる上に、寛永年間を去る遠く、上記四種の如く各年代を接して刊行せられたるものにあざれば、今はこれを論述せず。この萬治本は寛

永本に依據したるものなれど、初めて挿圖を加へて印行したる事は、特に注意すべきものなり。予は只この一點を茲に記すに止めて他をいはざるべし。

結 論

以上文祿以下五種の伊曾保物語翻譯書中其の最初の文祿二年本は、南蠻耶蘇教徒が其の學林用に刊行せるものにして、他の四種とは何等の關係あるなく、全く別種の者といふべし。慶長以下の四種は、互に關係を有するを認む。先づ和刻國字の伊曾保物語の翻譯は、慶長本を以て其の初めとす。而して其の原本及譯者を詳知する能はざるは惜むべし。この本斯種の祖書となりて元和版となり、元和版は又寛永本となりて、順次其の基をなし、只、各字體、版式に些少の變更を施したるに過ぎざるを認む。寛永の後、稍時を隔て、萬治二年に

至り、寛永版に挿圖を加へて初めて印行せられ、爾後屢版を重ねて明治の世に及べり。就中、慶長本は斯種刊行本の祖書なるに拘らず、これが存在を知れる人世に極めて稀なるが如し。今、予が茲に本篇を草したるは、其の意この慶長本の存在を紹介し、併せて其の類書の徑路を辿り、其の關係を示すに在りと雖も、予が望はこの和刻伊曾保物語の祖書の存在を示せば足れり。

若し本篇にして西文東移の史上、其研究の一端に値する所あらばこれ予の望外の幸なりとす。終に臨んで予が起稿に際し、新村博士の所説に負ふ所多く、又、内野大槻二氏が其の珍藏本の閱覽を快諾せられたる、且、山田孝雄、大濱六郎兩氏が他の古版本の借覽に便宜を與へられたる事は、予の深く感謝の意を表する所たり。